

## 財政学～ゼロからの出発～

早見 弘

最終講義の機会をもたずに緑丘を去った者として、『商学討究』に寄稿の機会を与えられたことに、お礼申し上げます。しかし、考えてみますと、消えてゆく言葉ではなく、書かれた文字で最終講義に代わる一文をお送りするとなると、34年の在職を顧みて、いささか心もとない自省を感じます。スティグラもいっているように、「新しい知識を作り出す能力は、同業の学界仲間でもっとも高い評価をうけることだ」とすると、私なぞは一行も書けないに違いありません。しかし、それほど気張らなくても、いささかなりとはいえ、お役にたった論文もないわけでもないし、同時に『商学討究』の名前も多少は売ったという、一人よがりを書きとどめておくのも、この機会であろうと思い直して筆をとりました。

略歴にも書きましたが、私の財政学専攻は母校に財政学担当の講師として採用されてから始まりました。その前に、なぜ大学院へ進学する気になったかと自問してみますと、はっきりいえるのは、小樽で優れた先生に出会ったからだ、ということです。ゼミ教官としての天利先生は、学生の向学心を引き出すことにかけては、天性といってもよい感覚をお持ちでした。とくに、学生の発言を決して否定したり、抹殺するほど批判したりしなかったのは、学生に自信をあたえました。僅か3年の小樽在勤でしたが、小樽経専の先輩10名近くが(旧制)大学の本科へ進学したのも、先生の影響によるところが大きいとおもいます。また、私が4年生の受験準備期に、長谷部先生はヒックス、ケインズ、クライン、ドップなど、戦後日本の経済学研究の対象になった著作を、天利先生とは違った厳密さで教えてくださいました。経済学とは経済現象のナイーヴな世界観ではなくて、経済分析の手法なのだという感覚をもったのもこの頃でした。

それは経験科学としての経済学の歩みを理論、歴史、政策の三分野から、整理した山田雄三先生の著書とともに、思い出多い一年でした。しかし、長谷部先生が担当されていた統計学、またゼミを受け継いだ早川先生が、日本で創成期の計量経済分析を発表されていたながら、統計学と数学をなおざりにしたのは私の落度でした。

さて、修士課程をおえて、引き続き一年間、一橋大学で財政学の手ほどきをして戴いたのは、木村元一先生でした。最初に示唆された文献は、アドルフ・ワグナーの *Finanzwissenschaft* (全4巻, 1883~1890年) でした。第3, 第4巻の財政史を除いても、優に千ページを越える大作です。財政本質論, 予算論, 経費論, 手数料論, 租税原則論とつづく伝統的財政学は、目次をみただけでも初心者には重荷です。それに受験以来忘れていたドイツ語です。先生も困った奴を抱えたな、と思われたに違いありません。遅々たる歩みでしたが、始めてみると、財政学には、どうしてかくも長々と「財政の本質」に多くのページを費やすのだろうか、という率直な疑問です。どちらかという、市場経済の機能的因果分析を知るほうに興味がありましたので、初めから本質を決めつけられるのは腑に落ちませんでした。それに、あの定義好きと分類癖。マズグレイトもハイデルベルグ大学での学生最後の年は、経済学より法学の勉強が *Deplom* のために必要だった、とっていますから、財政の専門家になるには避けて通れない問題なのでしょう（それでも彼はスウェーデンのヴィクセルとリンダールの財政学を知った上で、アメリカにわたっています。これが、1954年のサミュエルソンの「公共支出の純粹理論」の動機になったそうです。）

端的に言って、財政とは国家公共団体の統治行為にともなう貨幣収支勘定なので、初めに統治行為の特質とか国家組織論を通過しないと、先へ進めないことになるのでしょう。ワグナーによると、国家は個々の国民とは別な、共同体欲望をもつ。それはちょうど、親が子供の行末を案じて、教育したり、強制したりする温情主義的ないしは啓蒙的意志をもつ有機体である、ということでした。国家有機体説は彼の *belief* ですから、検証できる命題ではなく規範的命題ですが、それにつづく国家組織と市場組織の構成要素を挙証し、記述

する手法は、英米の財政研究では少なかったように思います。しかし、自身に満ちた重厚な筆致は、偉い先生だな、と思いました。

これは後から気付いたことですが、第二次大戦後、厚生経済学の視点から、国家の役割を理論的に基礎づけたのは、ボーモルであり、いっそう解析的な分析は、「厚生極大の単純解析」と「市場の失敗の解剖学」の2つの論文を書いたベイターだと思います。彼はこの二つの論文で不朽の名前を残したと思いますが、彼の整理では政府活動そのものが、公共財という市場の失敗因子の一つになっています。しかし、政府なしに市場が最適化するかということ、外部効果や費用逓減産業を除くなら、取引費用（情報の伝達、契約の締結、度量衡制度をふくむ取引単位の共通化、最終的債務決済手段としての通貨の発行など）が大き過ぎ、効率の阻害になるでしょう。市場が成立するためにも、政府が必要ではないのか、逆にいうと、無政府経済から市場の失敗を導出し、その矯正のために政府の強制力をもちいた手段が有用だ、（しかし、その活動は初めから失敗した市場性をもつ）という論理には、経済外的強制としてしか国家組織を見ていない、欠点があるようにおもいます。

この他にワグナーから学んだことは、財政の所得再分配政策の重要性ということでした。それは、移転支出による所得支持とか社会保険の発祥が19世紀末のドイツであったということよりも、最高税率わずか3%の累進税に“sehr glücklich”と賛辞をおくり、当時の文化国家プロイセンに期待した彼の国家論からでした。そんなことから、シェハーブの『累進課税論』を読んだり、イギリス所得税制史の文献を嚙ったりして、危なく歴史家になりそうだったとき、マスグレイヴ『財政理論——公共経済の研究』が出版されました。創立50周年を祝った1961年の9月に、北大に講演にきたマスグレイヴを小樽まで呼んできたのも、初版に沢山あった誤植を問い合わせたご縁からでした。これから暫くはマスグレイヴの余波がつづきました。公共財の最適配分条件を解いたサミュエルソン論文、公共選択に投票のパラドックスを指摘したアローの業績、投資関数に税制の効果を導入したE. C. ブラウン、そして累進税の構造とそのメジャーを展開したマスグレイヴ＝シンの論文など、ドイツ財

政学はどこへやら、この著作をガイドとして、現代応用経済分析の吸収に多忙でした。

幸か不幸か、1960年度の後期から経済学概論を担当することになり、サミュエルソン『経済学』をテキストにしていたから、その第4版は私にとっても忘れ難い入門書となりました。そのころから私の経済学に厳しい試練となったのは、概論の講義のみではなく、諸先生との「土曜研究会」でした。休暇中を除いた毎週の土曜日午後、古瀬、麻田、地主、竹内、吉武、藤井の諸先生、札幌からは農業総研にいた速水佑次郎さんも加わって、各自、自由な論題で回を重ねていきました。遠慮のない質問、批判を浴びせられるのは毎度のことで、私の大学院はこの研究会だったといえるでしょう。36～37歳までは、殆ど著書、論文の紹介ばかりやってました。この辺りから、世界の学界で問題になっている課題の見通しもつき、生き残る論文か否かの判断も少しずつ持てるようになった“つもり”です。そして、自分はこれらを越えられるか、そんな思いに駆り立てられていたのを思い出します。「給与所得税の累進度」、「相続税の再分配効果」などが、そのころの仕事になりましたが、前者は松代和郎氏の目に止まり、同氏の訳業『フェルナー、近代経済分析』の脚注に、日本の所得階層別・世帯別にみた所得税の限界税率、平均税率の数値として掲載されました。また、能勢哲也先生が、“弾性値低下の早見のファインディング”と書かれていたのは、面はゆい限りです。後者は、高橋泰蔵先生の退官記念号に寄稿したもので、シャープ税制以後の相続税制度の改変が、どのような遺産の再分配効果をもったか、これをジニ係数で測ったものです。乏しくかつ継続しない標識でまとめられている税務データしか使えなかったのですが、その頃、手がけた方がいなかったとみえて、租税法の神野直彦氏の論文に引用されました。

二度目のアメリカ出張からもどって、思わぬところから財政学テキスト執筆の依頼が入りました。同文館出版から400字詰めで450枚以内という注文でしたが、なんとかそれまでの講義原稿を、小さな本にしてもらいました。なぜ同文館の経済学シリーズの一冊になったかという、恐らく編者の一人、柏崎利之輔先生がフルブライト留学者選抜の英語面接委員の一人であり、出発前の

パーティでもお会いしたからであろうと推測しています。もう10余年前のことになりました。この本で思い出されるのは、木村先生が「僕の論文を引用してくれたのは、君だけだ」といわれたことです。本流の木村門下生はほかにもおられますが、学者なら同業の役に立つ仕事をするのが本望、というこの世界の基準からみると、この一言で長年の御恩にお返しができたと思えました。また、この小著が三宅一郎編著『合理的選択の政治学』で利用されているのを見たとき、望外の思いがしました。法律家といい政治学者といい、専門以外の諸先生が利用できた、というのは現代財政学にしては、レベルが低く分かりやすかったのかもしれませんが。これを以て銘すべきことなのでしょう。

学生として5年、教官として34年、緑が丘の山合いに建つ小さな大学は、私の生涯を過ごしたところといってもよい所になりました。小学生のころ、遠足で山上グラウンドへ向かって地獄坂を登っているとき、深閑とした森のなかに建つ薄緑色の校舎が、修道院か、療養所のようにみえたのを思い出します。今、建物こそ変わりましたが、丘の起伏、樹々の緑、見はるかす石狩湾の海の色は、私の青春、壮年そして初老の年まで変わることなく、私を見ていたように思えます。幼かったときの清冽な小樽高商キャンパスの印象は、修道院のように勉学にいそしみ、療養所のように良き師と療友・同僚に恵まれた年々となって、実現しました。振り返ると、財政学の道だけを求めたわけではありません。ゼミナールでは、財政文献よりもミクロ、マクロの経済理論のテキストを読んだ年度が、はるかにおおい回数でした。関心の赴くまま、あれこれと相手をさせられた学生諸君こそ、いい迷惑だったかもしれません。ただ一つ、言い訳を許されるなら、現在を知ってこそ、未来に生きる人々の役にたつであろうし、過ぎ去った歴史の意味も判別できるであろう、人生は温故知新に時を過ごせるほど長くはないから……このような選択に、私は安心を得ようとして、日々を過ごした、小樽の西の山合いでした。現在でも、北国にあるこの小さな大学に学び、またそこで研究し、教える人々が、世界を見据えた研鑽をつづけられるよう、切に祈っております。